



のになぜこんなにも長期間になつたのか、今でも不思議」と笑顔で語る。

エチオピアで医療ボランティアに携わっていたころ、がんやエイズウイルス(HIV)、奇病などで患者が毎日目の前で亡くなっていった。特に子どもや若い女性が多かったという。

「なぜこんな若い子がこんなつらい生活を送らなくてはならないのか、この土地の人たちは何を思つて生きているのだろう」そんな思いを抱きながら活動を続け、現在の活動拠点であるモザンビークへたどり着いた。

活動を知り広がる支援

モザンビークでエチオピアよりもさらに厳しく、貧しい生活をしている人たちを目の当たりにした栗山さんは「自分ができることはないか、自己満足で何の助けにもならないかもしれないけれど、今できる精いっぱいをやってみよう」との思いからNPO団体「アシヤンテママ」を立ち上げた。

現地には学校に通えず、教育を受ける機会すら与えられなかった多くの人がいる。日本にいれば誰もが得られる知識も現地の人たちは知らない。栗山さんは衛生指導や職業訓練を行い、出席に応じて支援物資がもらえるなど、興味をもって参加してもらえようという試行錯誤を繰り返して活動を続けている。

しかし活動には経費が掛かる。当初は自身の貯金を切り崩してやっとの思いで活動していたが、ブログが携帯配信され、活動をまとめ本(「なんにもないけどやってみた」岩波書店)が出版される



と、栗山さんの活動を知って寄付や物資支援をしてくれる人が増えていったという。それでもギリギリの生活に変わりはなく、空いた時間で外国語講師として働き収入を得ている。

栗山さんの活動を少しでも応援しようと御前崎市にも「さやかさんを応援する会」が発足し、現地の活動を支えている。

医療技術士を目指し

「自分の力で患者を救いたい」そんな思いから不足する医師に代わって医療行為ができるモザンビークの国家資格「医療技術士」の取得を目指す

ようになり、2012年に国立学校へ入学。支援活動を続けながら寝る間を惜しんで勉強に励んだ。本当に大変で泣

きながら勉強し、何度も諦めそうになったという。そんな努力が実を結び2014年12月、無事学校を卒業し資格を取得した。

「2006年に海外へ飛び出してから1度も帰国しなかった。もちろん帰りたくな

い訳ではなかったし、つらく厳しい生活に何度も帰ろうと思ったこともあった。日本を離れアフリカで一人生活していることは両親に心配ばかり掛けていたと思う。感謝と申し訳ないという思いでいっぱいです」と9年間離れていた両親への思いを語る。

現地で学ぶ事が多く、毎日があつという間に過ぎていく生活だった彼女にとつて資格取得は一つの目標であり、心の区切りでもあったという。

今後2年間は現地の病院で働かなくてはならないため、今回日本への帰国が実現した。当たり前ができる生活

現地では15歳まで生きられない子どもがたくさんいる。そんな生活を目の当たりにしながらがむしゃらに活動を続けた9年間、今回は自分の思いをあらためて考え直す帰国でもあった。「私が35歳まで生きられたことは奇跡と言つていいほど感謝しています。どれだけ恵まれた人生を送ってきたのか、帰国してあらためて感じました」と日本で当たり前の生活が送れる幸せを胸に刻む。

今後もモザンビークでの活動を続ける栗山さん。「ほんのわずかな支援でも現地では大きな力となります。これまで支援してくれた皆さんには本当に心から感謝しています。これからも私にできることを精いっぱい頑張っていきたいと思います」と感謝の思いと熱い決意を語る。

3月9日に現地へ戻り病院勤務とNPOの活動を両立する栗山さん、彼女の今後の活動を心から応援したい。